

山梨県北巨摩郡高根町
八ヶ岳東南麓
遺跡分布調査報告書

1986.3

山梨県教育委員会

序

八ヶ岳東南麓に位置する山梨県北杜市高根町念場原の県有林は、森林が大部分を占め、從来道路の所在はほとんど知られておりませんでしたが、周辺の開墾地から若干の繩文時代や平安時代の遺物が採集されたことや、隣接する長野県野辺山周辺の遺跡の分布状況などから考え、当然この地域にも相当数の遺跡の存在が想定されておりました。

たまたま、山梨県企業局及び林務部が、この地に「丘の公園」建設、「清里の森」造成事業に係る大規模な開発を、1983年度～89年度に実施する計画を立てましたので、この開発計画に先立って、遺跡保存との調整資料とするため、文化庁の国庫補助を得て詳細な分布調査を行うことになりました。

調査は1983年度から85年度まで、3次にわたって実施され、試掘坑の総数は、丘の公園内514ヶ所・清里の森内316ヶ所、計830ヶ所の多きに及びました。その結果、「丘の公園」内からは、ナイフ形石器・剝片・石核など先土器時代の石器多数をはじめ、繩文時代早期の土器や石器など、先土器時代から繩文時代の遺跡13ヶ所、また「清里の森」内からは、繩文時代中期の土器や石器・磨製石斧など、繩文時代の遺跡3ヶ所、さらに中世の五輪塔の一部などが、それぞれ発見されました。

本報告書は上記の成果をまとめたものですが、開発事業と遺跡保存との関係を調査するための有効な基礎資料が得られたと信じます。現に本分布調査の結果に基づき、1984年には、「丘の公園14番ホール遺跡範囲確認調査」が行われ、企業局の判断によって遺跡保存の措置が講ぜられましたことは、喜びに堪えないところであります。

末筆ながら、お世話をになった関係機関各位、並びに直接調査に当られた皆様方に厚く御礼申し上げます。

1986年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義

例　　言

1. 本書は、北巨摩郡高根町清里の県有林内の「丘の公園」建設予定地、「清里の森」造成予定地の文化庁の国庫補助事業八ヶ岳東南麓遺跡分布調査報告書である。
2. 本調査は、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。担当者は、第1次調査が坂本美夫、保坂康夫、第2・3次調査が保坂康夫である。
3. 本書は、保坂が執筆・編集した。遺物写真は、塙原明生(日本写真家协会会员)が担当した。
4. 調査参加者は、下記のとおりである。(敬称略、順序不同)
大野清栄、曾見仁、浅川輝枝、高野俊彦、榎本勝、浅川光子、清水たつ子、富沢和久、八巻栄、浅川美代、篠原邦彦、堀川覚雄、長田光枝、重川英雄、重川八千子、重川恵美子、宮原渚、谷口信、中沢ゆみ子、藤原芳郎、中島ねのえ、清水あづま、奥水義一、浅川英三、小林あさよ、八巻知子、八巻久子、堀川てる代、堀川正忠、堀川志き、深沢昭三
5. 整理作業参加者は、下記のとおりである。(敬称略、順序不同)
名取洋子、弦間千鶴、若尾澄子、岸崎浩実、小笠原睦子、後藤良美
6. 調査から報告書作成に至る過程で、次の方々から御協力、助言を賜った。厚く御礼申し上げる次第である。(敬称略、順序不同)
谷口彰男、早川建夫、小尾正彦、菊島利雄、河西学、末木健

目　　次

I	調査に至る経緯	1
II	調査の方法と経過	1
III	周辺の環境	1
IV	調査の成果	
A	丘の公園地域	
1.	試掘坑の配置	3
2.	層序	3
3.	遺構	12
4.	遺物	13
B	清里の森地域	
1.	試掘坑の配置	20
2.	層序	20
3.	遺構	20
4.	遺物	24
V	遺跡の分布	28

I 調査に至る経緯

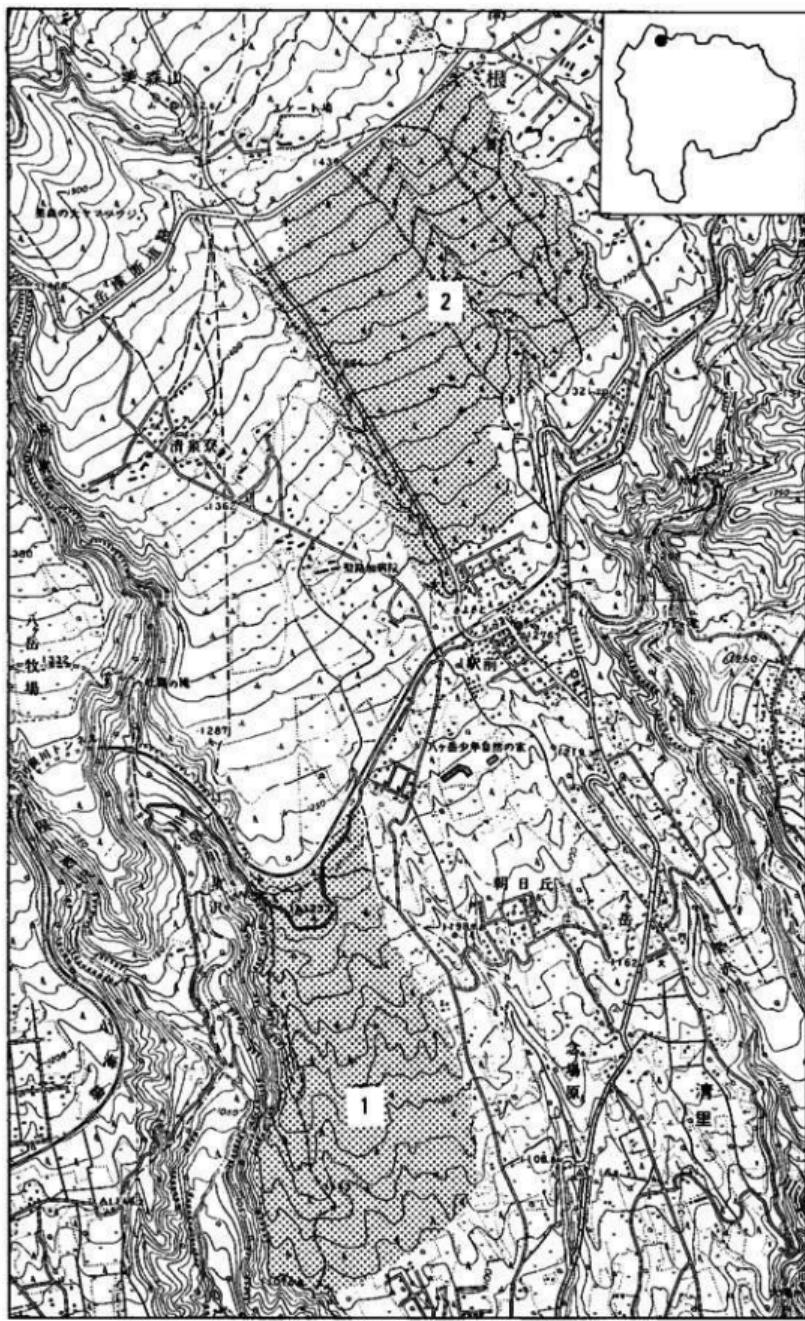
山梨県の北西部の八ヶ岳山麓には、広大な県有林がある。こうした、県有資産を効率的に開発・利用して、県財政に資するべく、広域な開発計画が立案された。県企業局により、ゴルフ場やテニス・コートなどを有する総合スポーツ・レクリエーション施設「丘の公園」建設が計画された。また、県林務部により、テニス・コートなどのレクリエーション施設を有する別荘分譲地「清里の森」造成が計画された。両計画は、昭和58年度から数年間に実施されることになった。丘の公園建設予定地131ha、清里の森造成予定地200haにおよぶ大規模開発事業である。開発予定地の高根町清里は、念場原という広大で平坦な台地上にある。標高1000m～1300mほどの高冷地にあるが、戦後の入植・開墾の中で、地元の研究者が縄文時代早期から平安時代にわたる土器、石器などを採集しており、遺跡の存在が知られている。また、先土器時代の遺跡集中地として名高い長野県野辺山原とは、3kmほどの距離をおいて隣接しており、地形的にも標高も近似することから、先土器時代遺跡の存在も予想された。そこで、丘の公園、清里の森予定地内の遺跡保護のための資料とすべく、遺跡分布調査を計画した。両地域は、林地であるため、試掘坑により遺物・遺構の有無を確認することとした。遺跡分布調査は、文化財保存事業として国庫補助を受け、昭和58年度から昭和60年度まで、三次にわたって行なった。調査は、県企業局、県林務部、県教育委員会文化課の協力を得て、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。なお、本調査で確認された遺跡は、県企業局・県林務部と県教育委員会文化課とで協議し、範囲確認などの保護対策が実施されている。第1次調査で確認された丘の公園14番ホール遺跡が、昭和59年に県企業局の協力により範囲確認調査され、保存されたのはその一例である。（山梨県教育委員会・企業局『丘の公園14番ホール遺跡範囲確認調査報告書』1985）。

II 調査の方法と経過

調査対象地域は林地であり、試掘坑により遺跡の有無を確認した。丘の公園地域では、企業局が設定した100m方眼の座標杭をたよりに、約25m間隔で514ヶ所設定した。清里の森地域では、主に道路と建物の予定地を対象に、林務部が設定した20m間隔の道路センター杭をたよりに、20～50m間隔で316ヶ所設定した。試掘坑は、遺跡が立地しそうな平坦地に主に設定し、河川敷や低湿地、疊原などは避けた。大きさは、1.5m四方前後とし、ローム層上面から30cmほどまで掘り下げた。第1次調査は丘の公園・清里の森両地域を対象に、昭和58年10月6日から同年11月15日まで。第2次調査は両地域を対象に、昭和59年9月25日から同年11月1日まで。第3次調査は清里の森地域を対象に昭和60年10月3日から同年10月9日まで行なった。

III 周辺の環境

丘の公園地域は、日本最高所を走る国鉄小海線より南側にあり、標高1100～1240mである。川俣川によって削られた100mもの崖線に沿う、幅500m～1km、長さ2kmほどの地域である。基底部に下末吉層堆積期の重崎岩屑層やそれを覆う弘法坂疊層がみられる念場原の西端部である。



第1図 調査地位置図 25000分の1 (1が丘の公園地域、2が清里の森地域)

本地域には、御岳山起源のPm-I(約8万年前)を含む中部ローム層とPm-IV(約3万年前)以上の上部ローム層によりなる平坦地が、河川の浸食により削り出された形で南北に帯状にある。また、疊層や疊を含むローム層よりなる低地も広く分布する。こうした低地は、高平坦地の間と、本地域東部に分布し、中部・上部ローム層の高平坦地は西部に発達している。本地域は、現在植林されたカラマツが覆っている。清里の森地域は、小海線より北側、八ヶ岳横断道路より南側にあり、標高1300~1440mである。幅1300m、長さ1800mほどの地域で、念場原の北方に位置する。小河川が多数入り込み、低湿で小起伏に豊む。丘の公園地域のようなローム層よりなる高平坦地ではなく、同地域の東半部のように疊層や疊を含むローム層よりなる低地がほとんどで、一面に疊が露出した疊原もみられる。地元の研究者谷口彰男氏の御教授によると、念場原の開墾地から縄文時代早期~中期、古墳時代前期、平安時代などの遺物が出土したといふ。また、新津健氏によると、美森山北方のキャンプ場で有舌尖頭器を採集したといふ。さらに、カラマツ湖でも剝片が採集されている。念場原は、平安時代の甲斐国三御牧の一つ柏前牧の比定地(磯貝・飯田『山梨県の歴史』1973)であり、「甲斐国志」の記述によれば中世に念場千軒と称され栄えたといふ。先土器から中世に至る大遺跡群の存在が予想される地域である。

IV 調査の結果

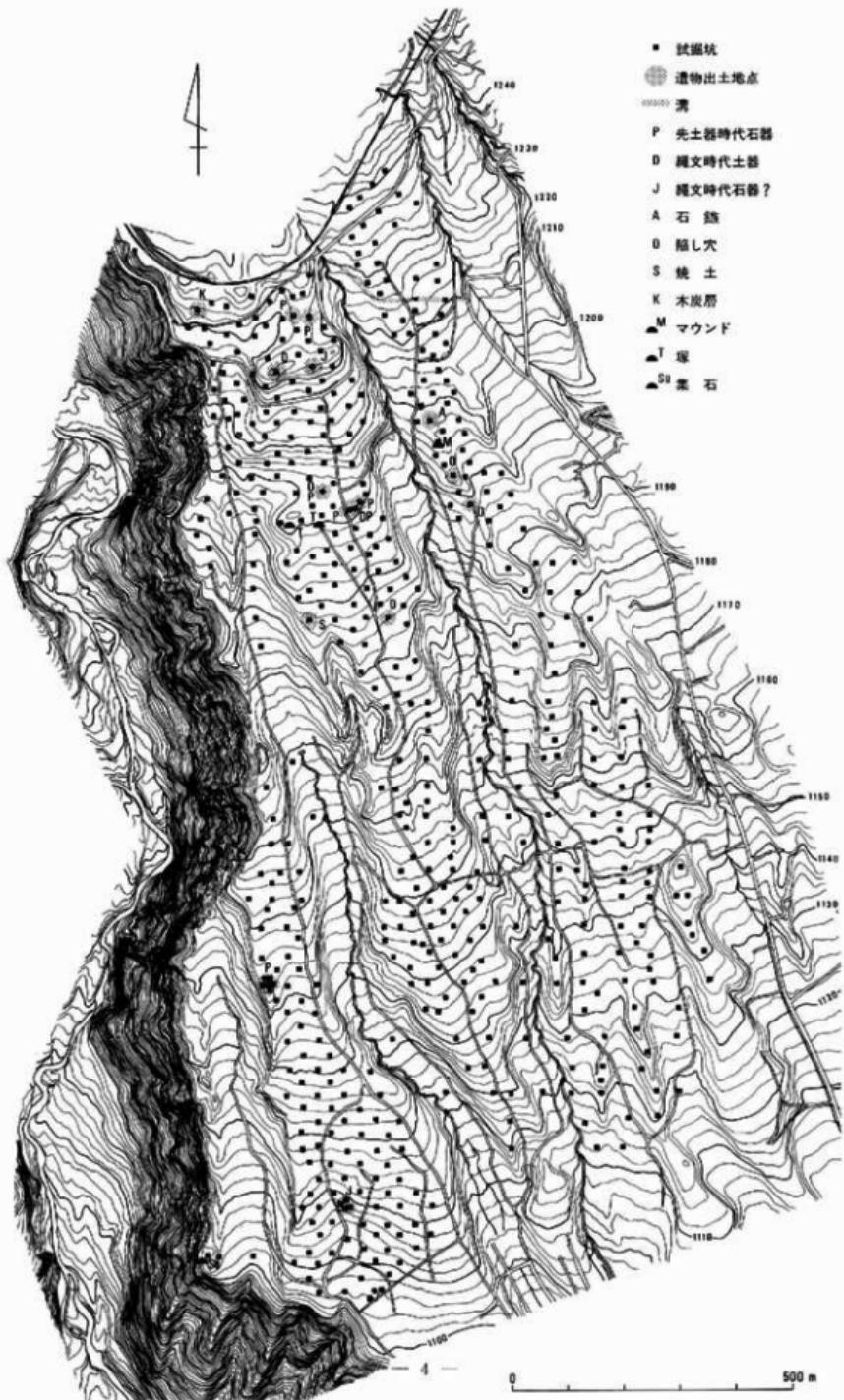
A 丘の公園地域

1. 試掘坑の配置(第2・3・4図)

試掘坑は、おおむね25m間隔で設定した。現地は、カラマツ林と下草の藪で見通しがきかない。企業局が100m方眼の座標軸を設定するために藪を切った小道をたよりに、杭からメジャーで測り出して試掘坑の位置を決めた。番号を東西方向にA列からS列までアルファベットの番号を付し、南北方向にアラビア数字を付した。いずれも企業局の座標軸に沿っており、所により番号が飛ぶ場合もある。設定は、谷部を避けた。深さは、ローム層上面からおおむね30cmの所までとしたが、風成堆積土が厚い所では危険なため、1.5m前後の深さまでとした。

2. 層序

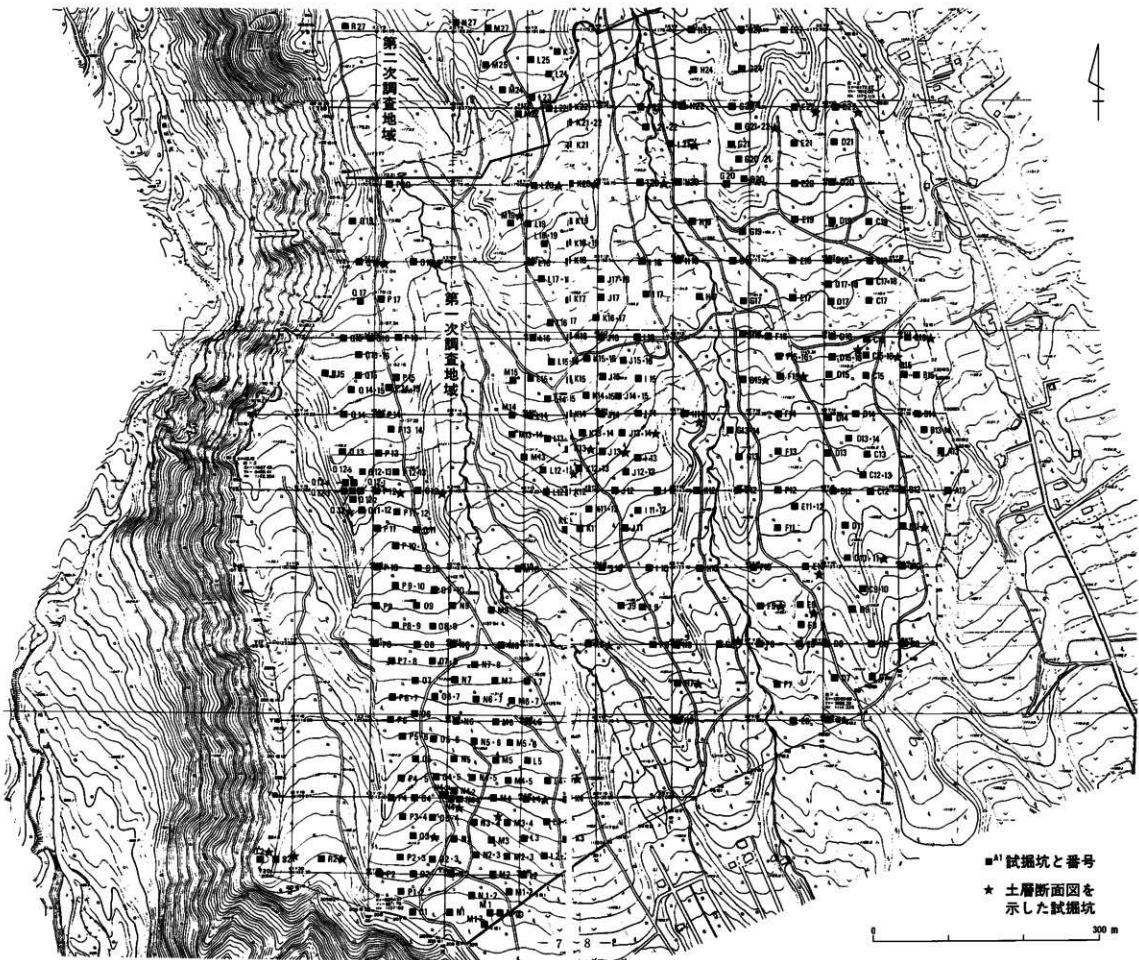
本地域では、風成堆積土層、黒色土層、ローム層、疊混入ローム層の四つの土層がみられる。風成堆積土層は、暗褐色を呈し非常に軟質でフカフカしたもの(第7図)と、黒褐色を呈し硬く縮っていて、幅数cmの黒色帯が何本かみられる場合があるもの(第8図)とがある。後者は試掘坑番号T33以北に分布する。いずれも母材となっている細かな砂粒が肉眼でも観察でき、土壤構造は塊状を呈さず粒子状あるいは團粒状である。下層にくる黒色土層との境界は直線的で明瞭であり、擾乱の跡がみられない。川俣川の崖線に沿って帯状に分布し、部分的に内陸に分布する(第12図)。崖線や高平坦地の西縁部では高さ2~3mの上手状の高まりを形成している。東にゆくと急激に厚さを減じている(第11図)。こうした状況から、急激に堆積した風成堆積土層であると判断した。本層は、いずれの場合も最上層となる。黒色土層は、調査対象地域を全面的に覆っている。高平坦地、低地の別なく分布する。上部は、漆黒色を呈し、軟かく均質である。下部は、黒褐色を呈し、上部より硬い。また、ローム層との境界部に両層が混在





第3図 丘の公園地域試掘坑位置図(1) 五〇〇〇分の一 (図は縮小表示)

第4図
丘の公園地域試掘坑位置図(2)
五〇〇〇分の一 (星印は企画立案供)



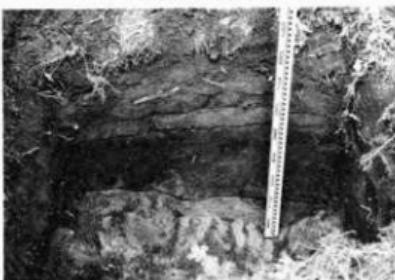
する漸移層が存在する。縄文早期の土器片は、本層下部の上半部から出土した。また、丘の公園14番ホール遺跡では、先土器時代最末期と思われる槍先形尖頭器石器群の生活面が、漸移層からローム層上部で確認された。ローム層は、軟質の上部と硬質の下部とに分かれる。ナイフ形石器などの先土器時代遺物は、軟質の上部(ソフトローム層)から出土した。ローム層は、主に高平坦地に分布する(第12図)。疊混入ロームは、低地部分にのみみられる(第12図)。砂程度から人頭大、さらにはひとつかえもある巨大礫までみられる。全て円礫ないしは亜円礫である。混在するロームは、ソフトロームに近似する。また、所によっては、まったく礫ばかり



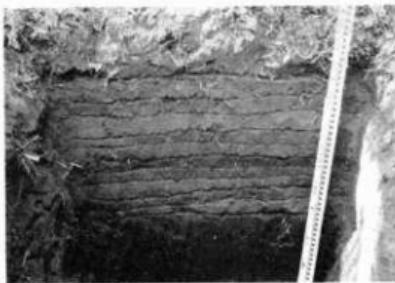
第7図 風成堆積土層(Q12)



第5図 調査風景



第6図 疊混入ローム層(T35)



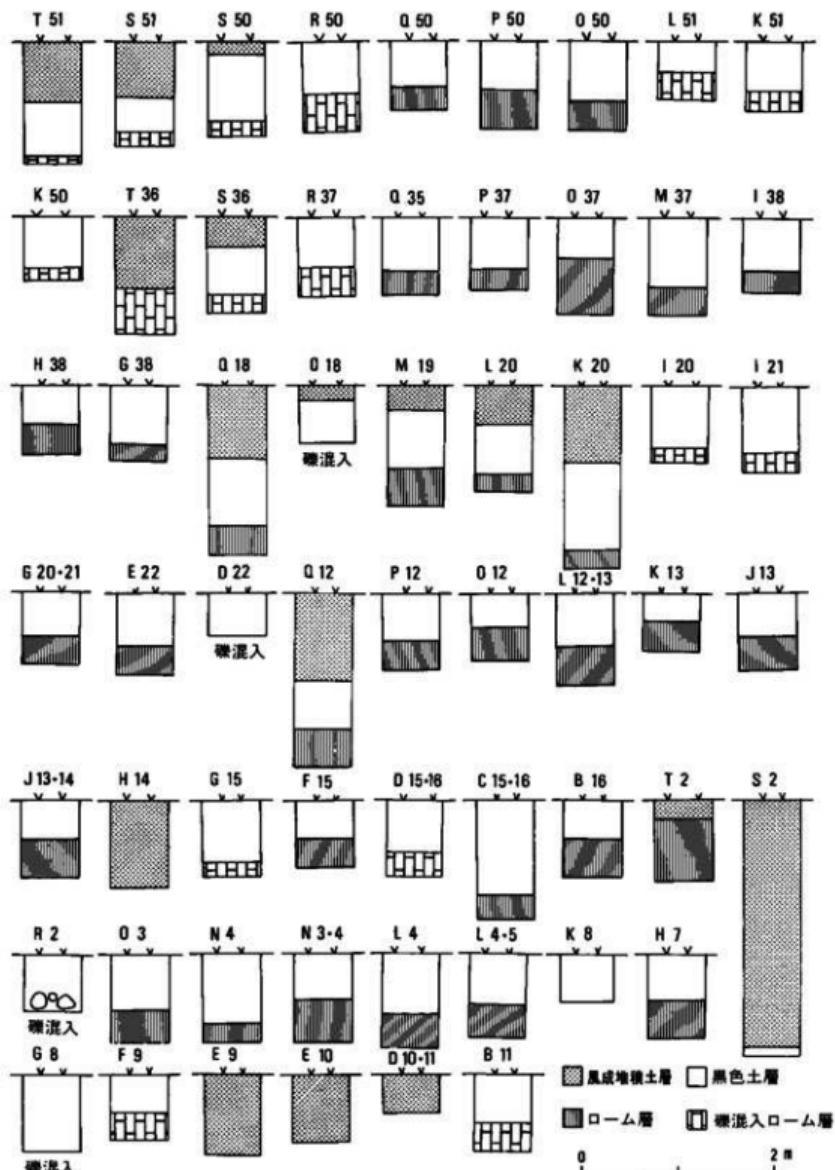
第8図 風成堆積土層(S46)



第9図 黒色土層とローム層(P12)

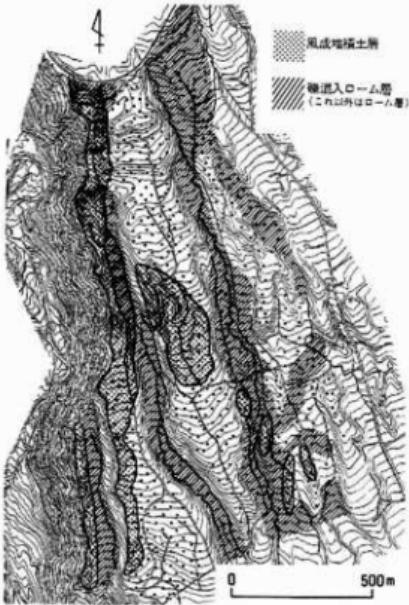


第10図 矶層(I18)

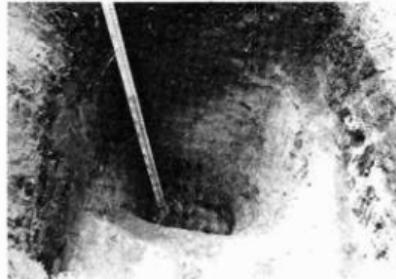


第11図 丘の公園地域土層断面図（数字は試掘坑番号）

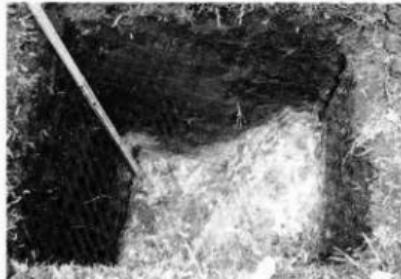
の所もある（第10図）。ローム層あるいは、礫混入ローム層が最下層となる。両者の上を黒色土層が等しく覆う点からして、両者の形成終了時点が同時であると考えられる。また、礫混入ローム層は、本地域北部及び東部に多く、また後述する清里の森地域に一般的にみられる点、西部の高平坦地には、川俣川崖線によって切られた谷が存在し、この部分に礫混入ローム層が分布する点から、八ヶ岳山体からの礫供給活動が、ローム層よりなる高平坦地の形成を妨げたり、それを削ったりしたが、本地域西部では、その活動部である谷が川俣川によって切られたため中断され、高平坦地の発達が促進されたか、削られずにすんだものと思われる。また、風成堆積土層は、川俣川の谷間に吹く風と関連するものと思われるが、内陸に分布するものは、おそらく、その風がかなりの強さで及んだ部分と思われ



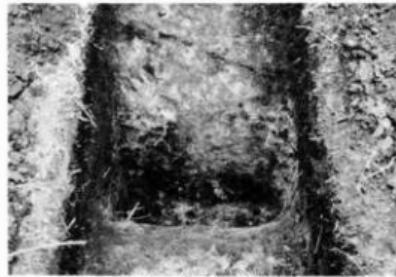
第12図 丘の公園地域土層分布図



第13図 陥し穴(O 38)



第14図 陥し穴(N 37-2)



第15図 陥し穴(Q 47)



第16図 陥し穴(J 39)

る。風成堆積土が内陸で広く分布する本地域中央部は、川俣川崖線によって高平坦地がそっくり削られ、谷部が崖線側に露出した部分であり、風が直接内陸の高平坦地に至り、さらにその余力が南東方向の線上に風成堆積土を堆積させたものと考える。

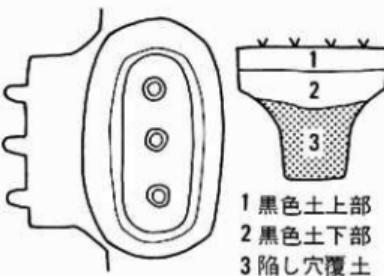
3. 遺構

本地域では、陥し穴5基、焼土1ヶ所、木炭層1ヶ所を黒色土層中で確認した。また、溝1本、マウンド1基、塚2基、集石1基を黒色土層上面、現地表面で確認した。

陥し穴は、試掘坑番号O38（第13図）、N37-2（第14図）、Q47（第15図）、J39（第16図）で確認し、一部を掘り下げ遺物の有無を確認した。また、H37ではその掘り込み面を確認したが掘り下げなかった。平面形は、全て長楕円形で、おおむね長さ2m内外と思われる。断面形は、上半がラッパ状に開き、下半がほぼ垂直に落ちるもので、底面は平坦である。また、底部に、直径20cm内外の穴を3ヶ所前後、直線的に配置しているものと思われる。陥し穴の深さは1m内外、穴の深さもかなりあると思われる（第17図）。土層は、陥し穴内にローム粒子を含む黒色土やローム層に近い軟質褐色土がみられる。その上を黒色土層が覆うが、上・下部ともにみられる。掘り込み面は、黒色土層下部中にあるものと思われる。したがって、縄文早期のものと思われる。

焼土は、P29で確認した（第18図中、手前の高まりが焼土）。1m内外の範囲に厚さ10cmほどで分布していた。黒色土層下部中で確認しており、縄文早期のものと思われる。遺物は出土しなかった。

木炭層は、T52で確認した。第19図は、試掘坑の北壁であるが、3層が木炭層である。4層が黒色土層下部、2層が同層上部であり、黒色



第17図 陥し穴概念図



第18図 焼土(P29)



第19図 木炭層(T52)



第20図 溝断面(J51)

土層下部を掘り込んで木炭層が形成されている。木炭層はローム層上面に乗っており、黒色土層上部上面に木炭を混える土層が若干分布する。1層は風成堆積土層である。遺物はみられなかったが、以上の状況から人為的なものである可能性があると判断した。掘り込み面が黒色土層下部の上面であり、縄文早期に近い時期のものと思われる。

溝は、本地域北東部にあり、谷から南東方向へのびている。L52、J51（第20図）で切ってみたが、黒色土層上面から掘り込まれ、大型の礫を含む砂礫層がみられ、黒色土層中よりも草木の根がよく発達していた。深さ約50cm、幅約1mで、底部は平坦である。遺物の出土はなかった。谷口彰男氏の御教示によると、氏が開墾に入る昭和31年にはすでに存在していたという。

マウンドは、企業局設定のX 5 Y 5、X 5 Y 6の杭の間にあり、高さ約2m、直径約10mのゆるやかな盛りあがりである（第21図）。頂部に設定したJ 41-2では、角礫や亜角礫の礫層がみられ、間隙には黄色砂質土がみられた。マウンドが位置する場所は、帯状のローム層台地の頂頭であり、すぐ南側のJ 41では黒色土層とローム層がみられる点から、黒色土層上に礫を盛ったものと判断した。遺物はみられなかったが、人為的なものだろう。マウンド北側の平坦地に、蟹塚風の穴が4ヵ所あり、この排土かもしれない。この穴には、コンクリートブロックがみられ、かなり新しいものと思われる。

塚は、X 2 Y 7、X 3 Y 7の杭付近にみられた。1mほどの高さに土を盛り上げたもので、頂部に道標が設置されており、道しるべの塚であろう（第22図）。

集石は、T 2の西側、崖線の肩部にあった。径40~20cmほどの円礫を、1辺約1mの方形に敷いたものである。風成堆積土層上面にあり、土の被覆がみられないことから、かなり新しいものと思われる（第23図）。

4. 遺物

本地域から、ナイフ形石器や石核などの先上器時代石器群や縄文時代の石錐、縄文時代早期



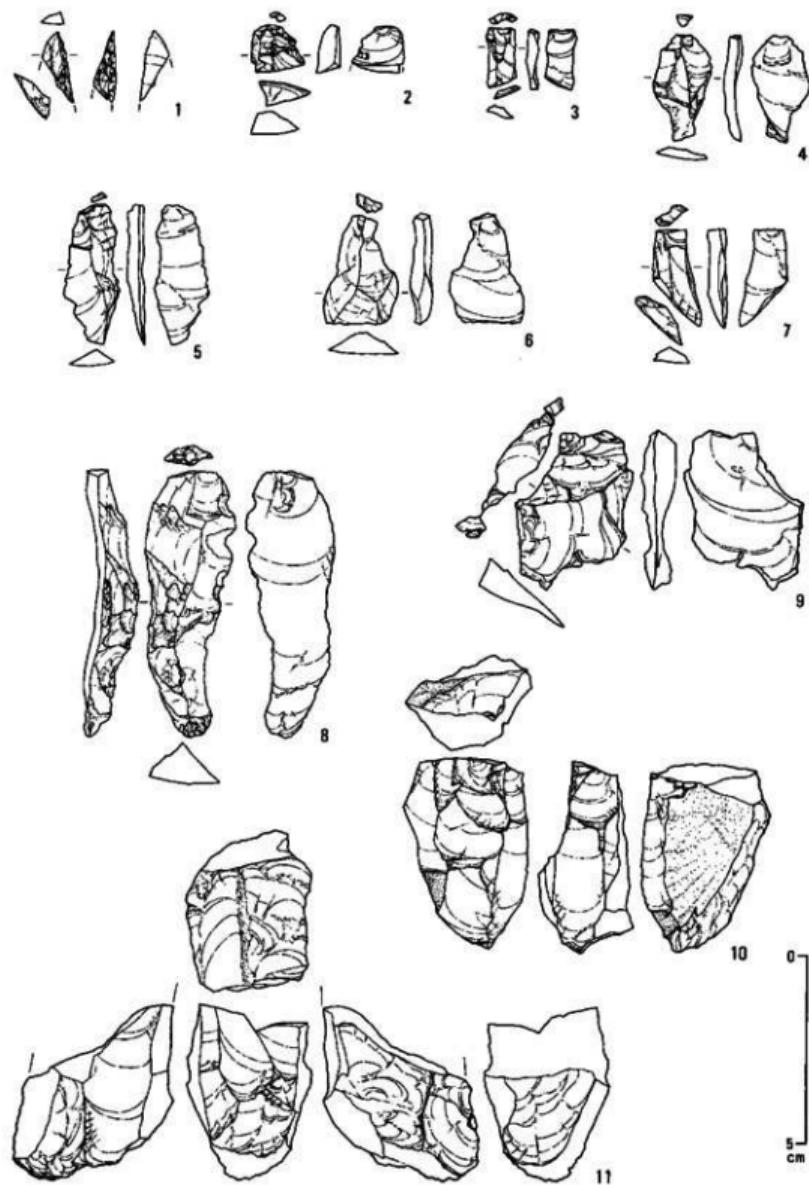
第21図 マウンド



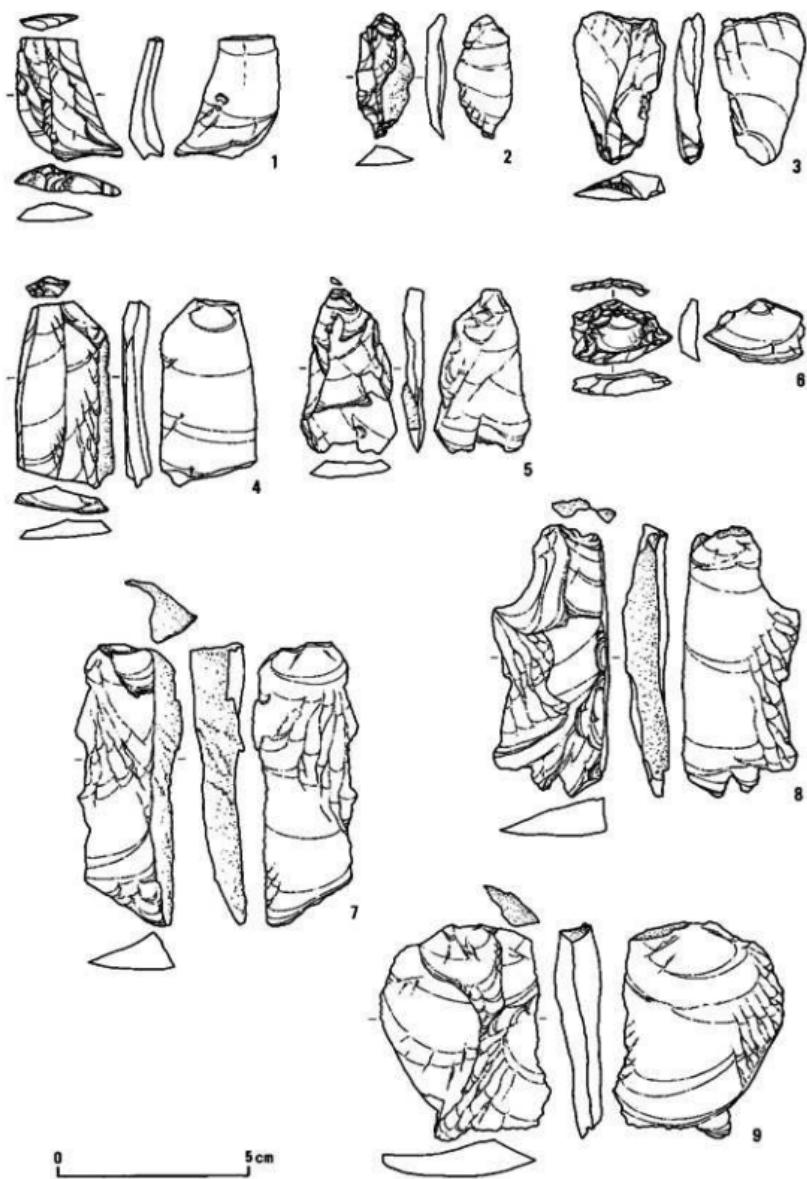
第22図 塚



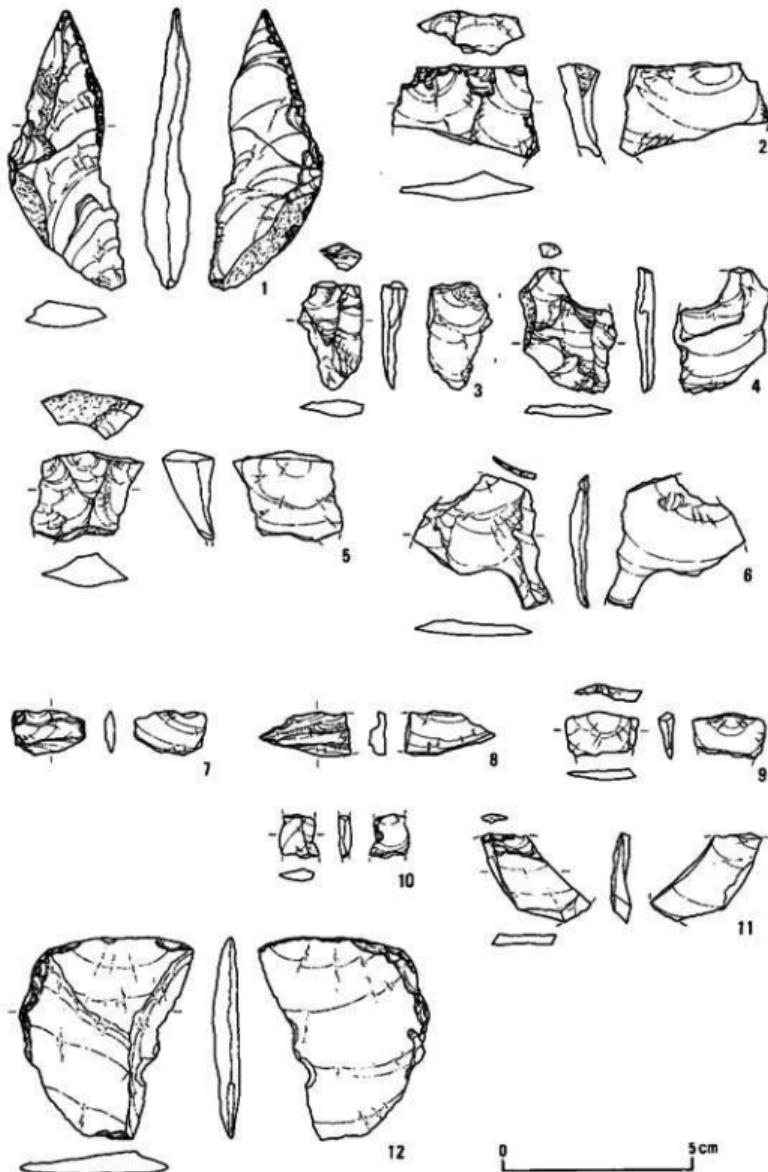
第23図 集石



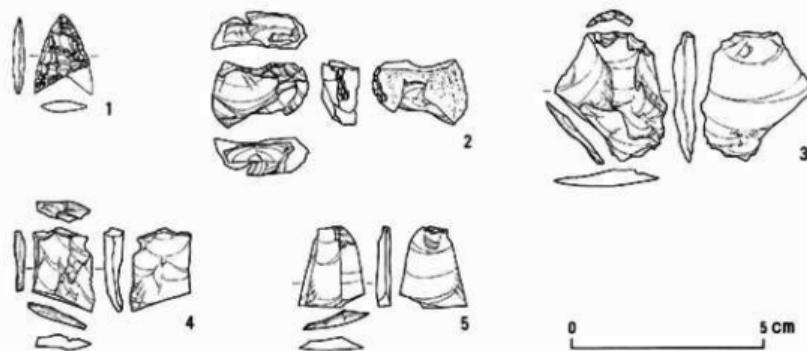
第24図 出土石器(1)



第25图 出土石器(2)



第26圖 出土石器(3)



第27図 出土石器(4)

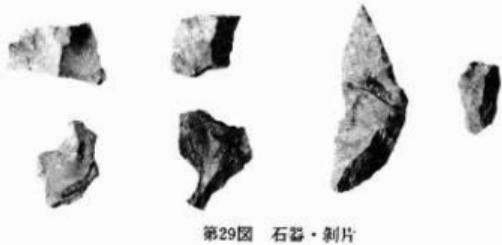
末から前期初頭と思われる土器が出土した。

先土器時代と思われる石器
 ・剥片は、N 37からナイフ形石器先端破片1点（第24図1）
 縦長剥片石核2点（第24図10・11）、剥片12点（第24図2～9、内小剥片は写真のみ示した。第28図）が出土した。

剥片のうち1点は、いわゆる稜形剥片である（第24図8）。
 第24図2・3と小剥片1点が黒曜石、9がメノーである他は、全てシルト岩である。これらは、ローム層上面から約20cmほどの間で出土した。N 37-2から剥片7点（第25図1・2、内小剥片は写真のみ示した。第36図）が出土した。
 第25図1の他、小剥片3点が黒曜石、他はシルト岩である。M 37-2では、二次加工である剥片1点（第25図3）、剥片3点（第25図4・5、第37図）が出土した。第25図3がチャ



第28図 石器・剥片



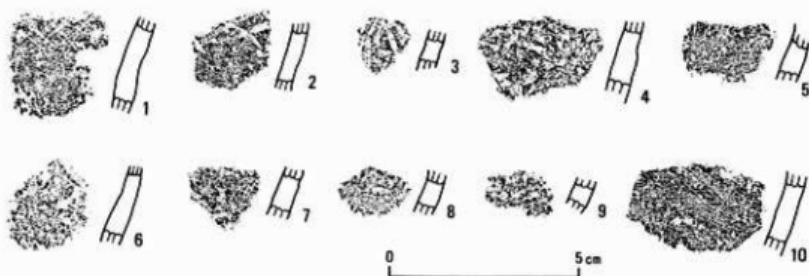
第29図 石器・剥片



第30図 剥片

第31図
石錐第32図
石核第33図
剝片第34図
石核第35図
剝片第36図
剝片第37図
剝片第38図
剝片

ート、他はシルト岩である。O 38では、N 37-2同様陥し穴の中から剝片4点（第25図6～9）が出土した。第25図6が黒曜石、他はシルト岩である。形状や剝離の状況からして、槍先形尖頭器に伴うものである可能性がある。Q 12から石錐1点（第26図1）、剝片5点（第26図2～6）が出土した。Q 12-1から剝片1点（第26図8）、Q 12-2から剝片4点（第26図7・9～11）が出土した。これらは全てシルト岩である。Q 12付近は、昭和59年に企業局の協力により遺跡範囲確認調査を行ない、直径30mほどの槍先形尖頭器石器群の遺跡を確認した（山梨県教育委員会・企業局『丘の公園14番ホール遺跡範囲確認調査報告書』1985）。N 4から剝片1点（第26図12）が出土した。砂岩であり、黒色土中から出土した点からして、縄文時代の可能性がある。P 47から小石核1点（第27図2）が出土した。黒曜石。剝離状況からして、縄文時代の可能性もある。P 51-2から剝片1点（第27図3）、P 51から剝片1点（第27図4）が出土した。



第39図 出土土器拓影



第40図 出土土器

前者がシルト岩、後者が安山岩である。縄文土器の出土したL29から剥片1点（第27図5）が出土した。黒曜石。いずれも、先土器時代の可能性がある。

縄文時代の遺物では、J43から石鏃1点（第27図1）が出土した。黒曜石。L29からは、土器片14点（第39・40図）が出土した。いずれも同一個体と思われる。浅い沈線でX字あるいは格子文様を描いたものと思われる（第39図1～3）。おそらく文様は、口縁部付近にあり、胴下半は無文と思われる。胎土は黄褐色で砂粒や金雲母を多く含み、纖維の混入もみられる。内外面ともにナデ調整されている。また、第39図1には補修孔が1孔みられる。これらは、縄文早期末から前期初頭の土器群であろう。出土層位は、黒色土層下部の上半部であり、この土層の年代決定の材料となりうる。また、周辺では谷口彰男氏の牧場内で、押型文土器が出土しており、陥し穴や焼土の存在も含め、縄文早期後半から前期初頭の遺跡群が多く存在する可能性

がある。

B 清里の森地域

1. 試掘坑の配置 (第41~45図)

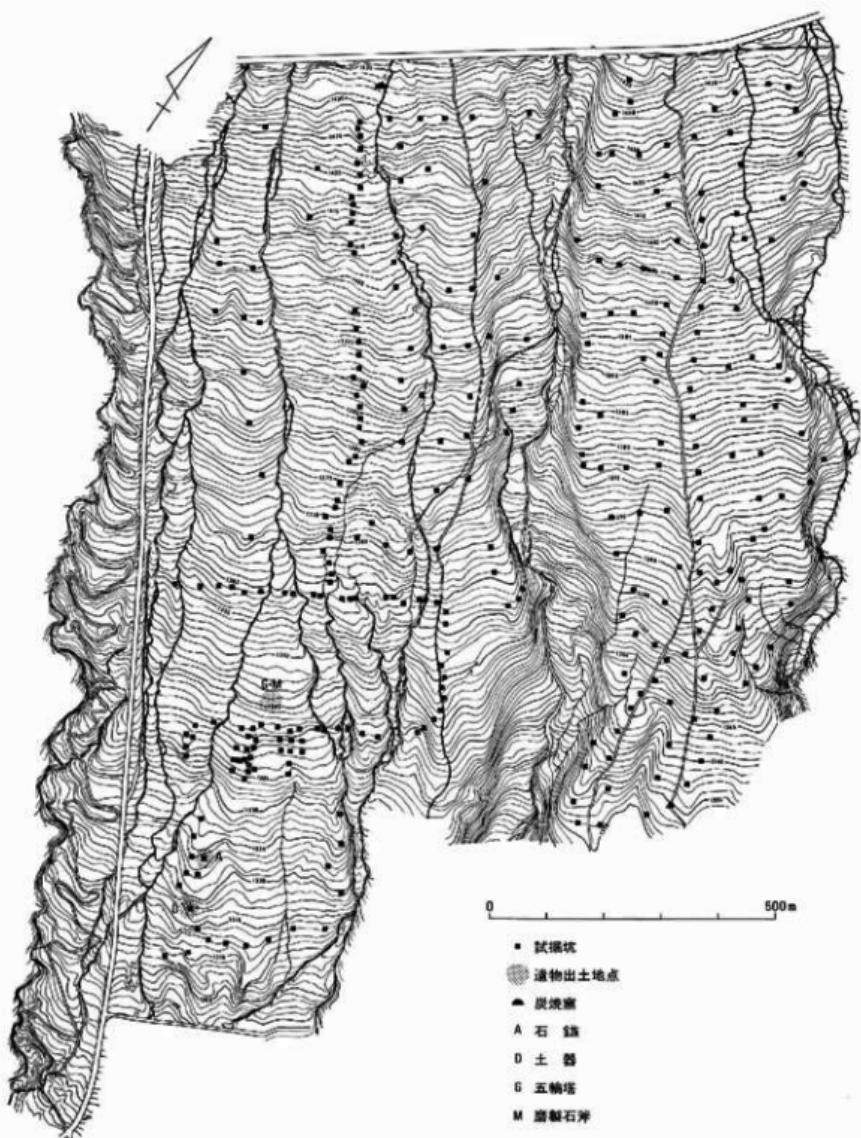
試掘坑は、第1次調査地域（第42図）では20m間隔、第2次（第43図）、第3次（第44・45図）調査地域では50m間隔で設定した。現地は、部分的にカラマツ植林があるものの、大半は雜木林で下草が繁茂している。林務部は、別荘地内を網目状に走る道路建設のために、そのセンター杭を20m間隔で設定したが、そうした杭をたよりに、杭からメジャーで測り出して試掘坑の位置を決めた。試掘坑は主に道路予定地に設定したが、本地域は、礫原の発達が著しく、また、地下水位が高く低湿地、湿地も所々に存在しており、小河川も無数にみられ、こうした部分では設定を避けた。試掘坑の番号は、各調査年次アラビア数字で設定順に付していったが、予定していた場所に設定できなかった場合は飛ばして付す場合もある。したがって、試掘坑の数と各調査年次の最終番号は、必ずしも一致しない。おおむね1.5m四方を掘り下げ、ローム層上面から30cm程度まで掘り下げることしたが、本地域には礫層や礫混入ローム層の発達が著しく、こうした層の上面まで掘り下げる場合が多い。

2. 層序

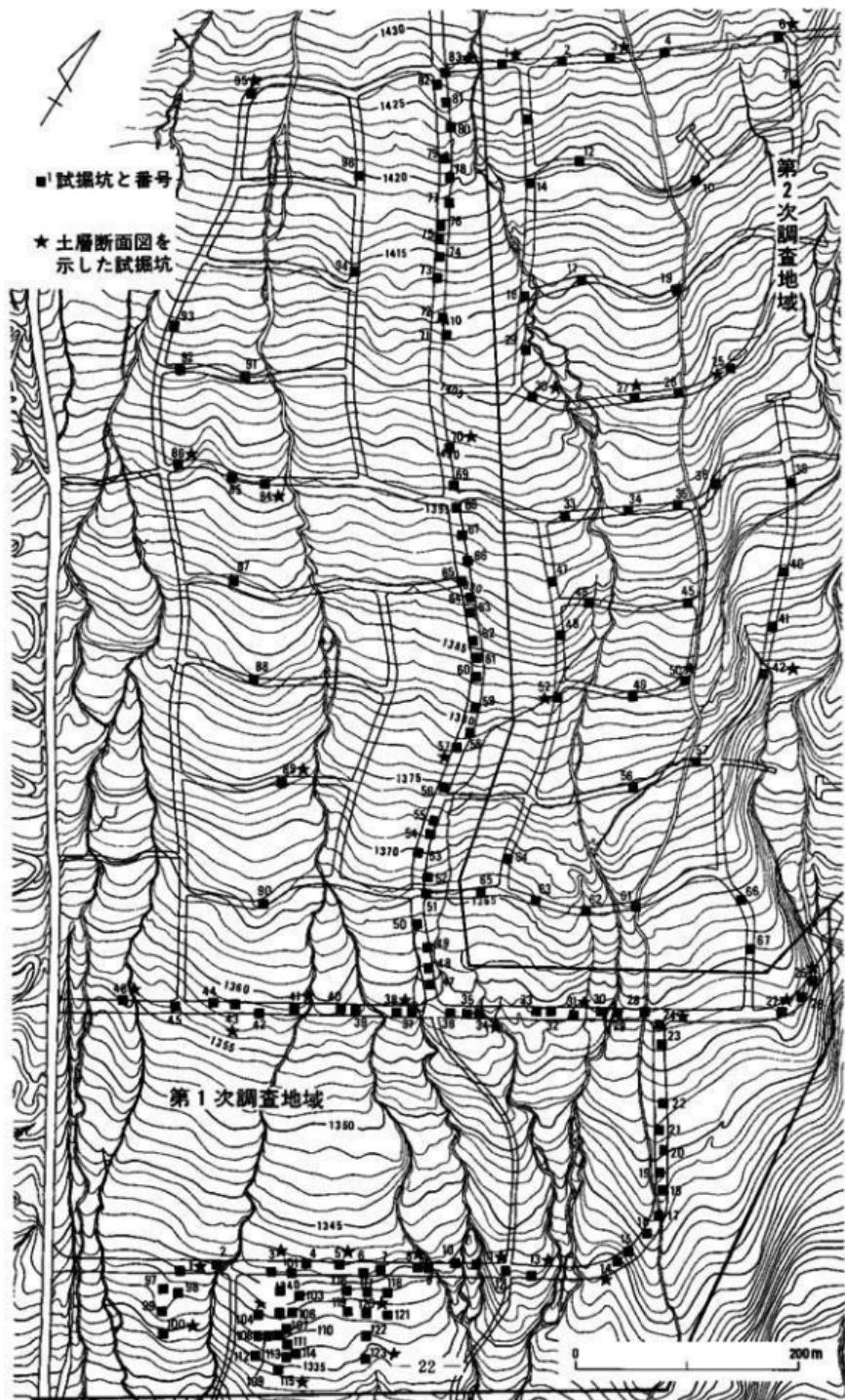
本地域では、黒色土層、ローム層、礫混入ローム層の三つの土層が基本的にみられた。丘の公園地域でみられた風成堆積土層は、存在しなかった。三層とも、その性状は丘の公園地域と同じである。この地域の特徴は、黒色土層の下層がほとんど礫混入ローム層であることである。礫混入ローム層は、巨大礫から砂粒ほどのものまでのさまざまな円礫・亜円礫を含むが、混入の程度もさまざまである。一般に、ローム層の分布地周辺では混入の程度が低い。また、ほとんど礫層といってよいほど礫の混入がみられるものが多い。黒色土層は、本地域ではその下部に礫を混入する場合がしばしばあった。こうした点からして、この地域では、ローム層堆積時ばかりか、黒色土層の形成段階でも礫の供給活動があったと思われる。さらに、礫原の存在からして、かなり新しい時期まで続いていると考えられる。この地域では、所々に湿地が存在する。何カ所かで掘り下げてみたが、地下水の湧出はあるものの黒色土層と礫層が存在するのみで、泥炭層のような低湿地特有の土層の発達はみられなかった。乾燥・湿润をくりかえしたのだろう。ローム層は少ないものの、調査地域の南半部にはかなりみられる。礫供給活動は、調査地域北部で特に激しく、南下するにしたがいその力が減じていったことがうかがえる。

3. 造構

本地域では、陥し穴2基を黒色土層中で確認した。また、炭焼き窯1基を現地表面で確認した。陥し穴は、第1次調査の試掘坑番号110（第49図）で確認し、一部を掘り下げる。形状は丘の公園地域の陥し穴と大差なく、上方がラッパ状に開き、底部が平坦で、小孔を有するものである。覆土は、上部がローム粒子を含む黒色土層で、下部はソフトローム層とみまちがうほど性質が近似した黄褐色土層であった。あるいは、この陥し穴が自然埋没する前半の時期は、まだローム層の形成が続いているのかもしれない。遺物の出土は、みられなかった。第1次調査の115では、陥し穴上面と思われる長楕円のプランを確認した。遺物の出土はなかった。

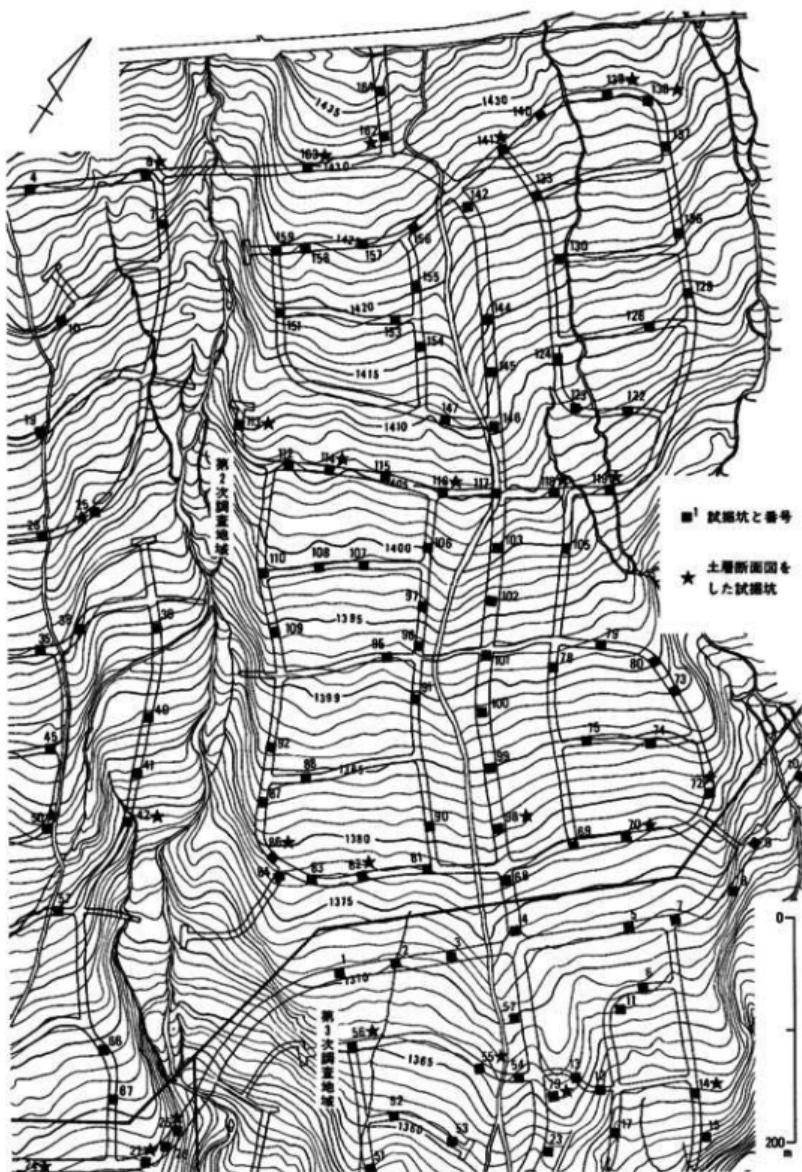


第41図 清里の森地域試掘坑配置及び遺跡位置図 10000分の1 (原図は林務部提供)

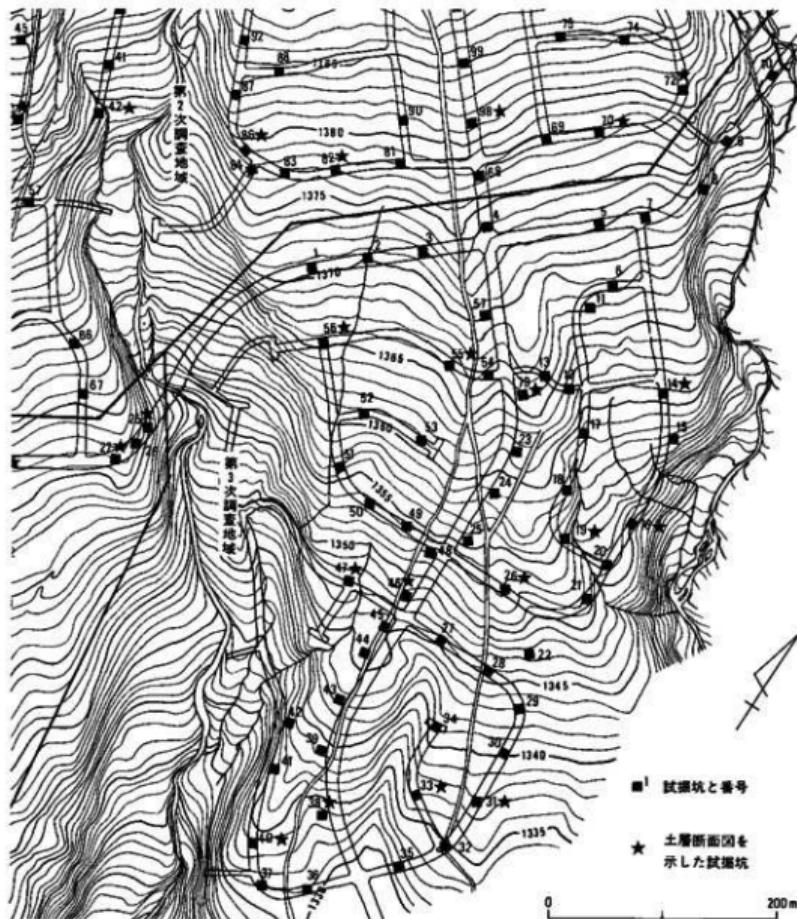


第42図 済里の森地域試掘坑位置図(1)

五〇〇〇分の、底図は林務省提供



第43図 清里の森地域試掘坑位置図(2) 5000分の1 (原図は林務部提供)

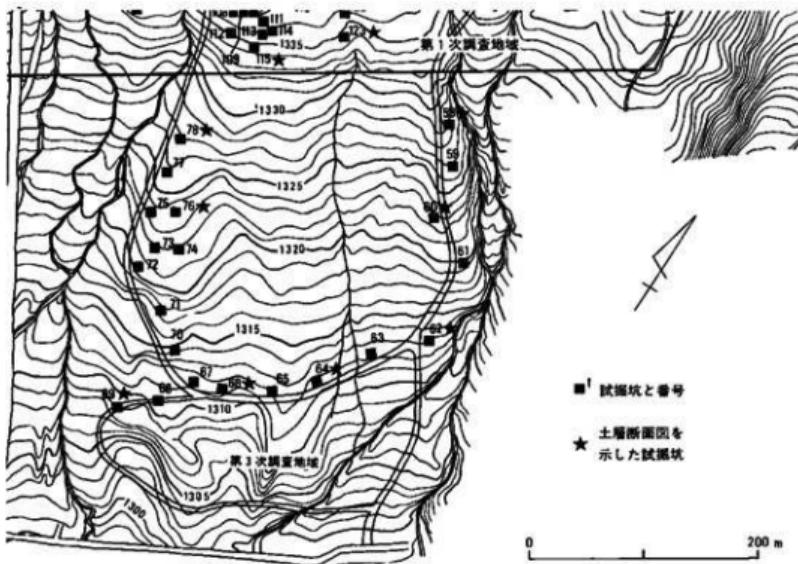


第44図 清里の森地域試掘坑位置図(3) 5000分の1 (原図は林務部提供)

炭焼き窯は、調査地域の北端、第1・2次調査地域の境界線上に存在していた（第51図）。大型の礫を八の字形に垂直に積み重ねて、焚き口部を作っている（第51図）。その奥に石室状の室を作り、周辺に土を盛っている。天井部は落ち込んでいたが、おそらく土石が覆っていたものと思われる。高さ約1.5m、直径約5mである。同様な炭焼き窯は、この炭焼き窯が面している沢すじに沿って何基か存在していることが予想される。

4. 造物

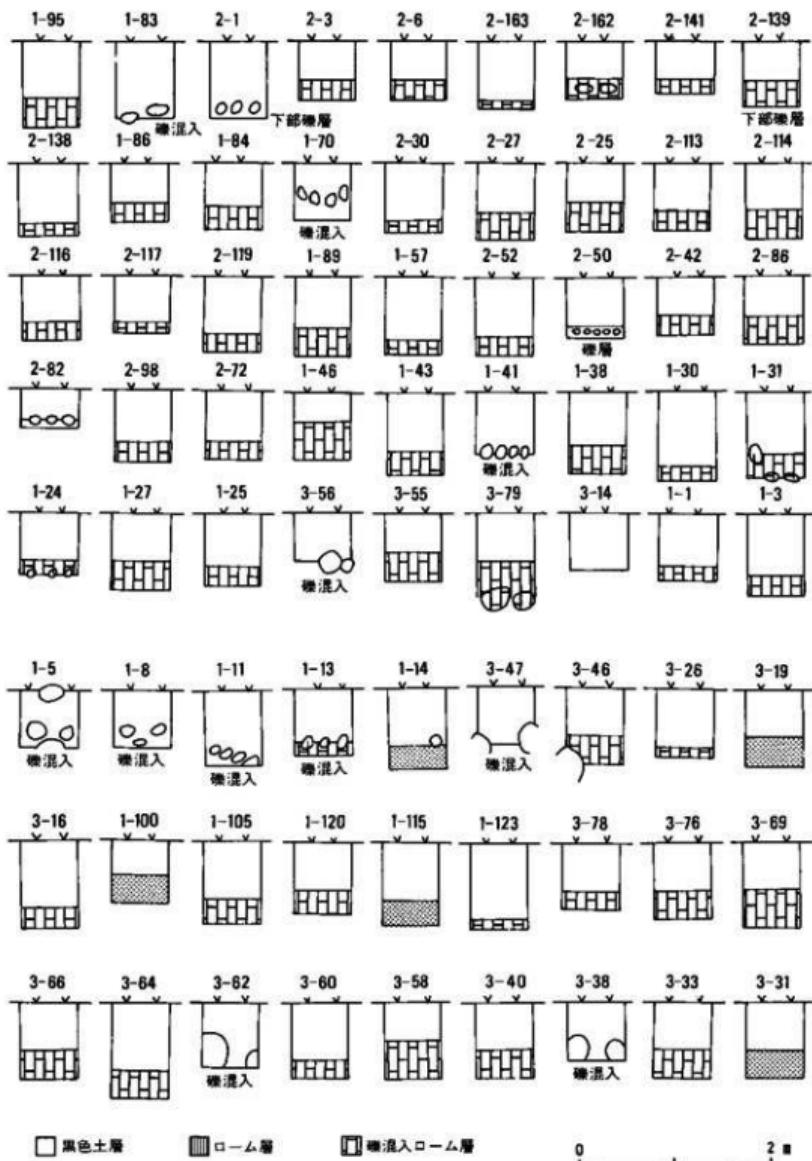
本地域から、縄文時代の石鏃や磨製石斧、縄文時代中期の土器、中世の五輪塔が出土した。石鏃は、第3次調査の試掘坑番号76から1点出土した(第56・57図)。無墓葬基盤である。黒



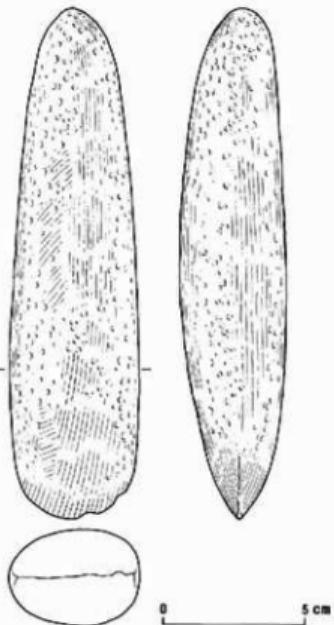
第45図 清里の森地域試掘坑位置図(4) 5000分の1 (原図は林務部提供)

磨石製。磨製石斧と五輪塔は、テニスコートの建設中に工事作業員が発見したものである。两者は、ほぼ同地点より出土したという。出土地は多量の礫が出るため、重機によってこれを取り除く作業中に、この礫の中から発見したという。五輪塔にはローム層の土が付着しており、礫混入ローム層中に埋め込まれていた可能性もある。出土地周辺は、礫の露出が著しく、杭等の目標もないため、調査を断念した地点であり、残念である。磨製石斧は完形品である（第47・55図）。乳棒形石斧で、おそらく中期のものであろう。本地域で確認された縄文中期土器との関連が注目される。緑色凝灰岩製である。五輪塔は、水輪である（第50・52図）。高さ13cm、最大径20.2cm。側面観は、中央やや上方に最大幅がくる形態である。上下両面ともやや窪んでいるが、下面の方が強い窪みである。上面最大径15.2cm、下面最大径13.5cm。上面中央部には、最大径7.3cm、深さ1.9cmの浅い穴が掘られている。また、上面端部に1回の加熱による剥離痕がみられる。安山岩製。

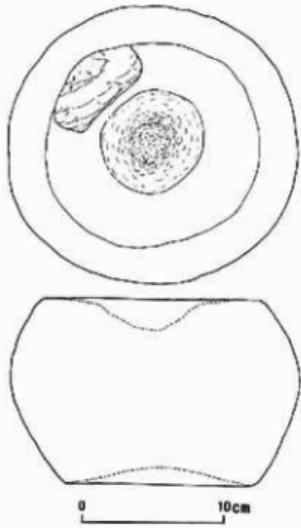
縄文時代中期の土器は、第3次調査の試掘坑番号71から出土した。総数28点出土したが、いずれも同一個体と思われる（第53・54図）。器形は、円筒形で、口縁・胴部がほぼ直立するが底部付近は外傾している。口唇部は平坦でよく磨かれている。口縁直下に、波状の沈線がめぐり、その直下に帯状に縄文がめぐる。その直下に再び波状の沈線や直線的な沈線が付され、おそらく三本の指の抽象文が付されるものと思われる。沈線で画され、盛り上がった抽象文は、下方に向いて三本指が付されると思われ、腕の部分には縄文が付されている。外傾する胴下部は、無文である。胎土に砂粒を多く含み、非常にもりい。出土した試掘坑は、傾斜地にありな



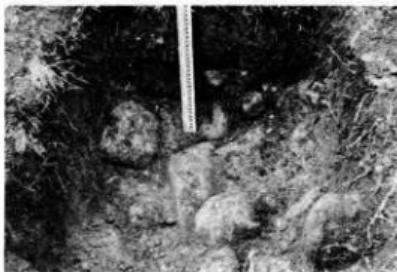
第46図 満里の森地域上層断面図（数字は、調査年次と試験坑番号）



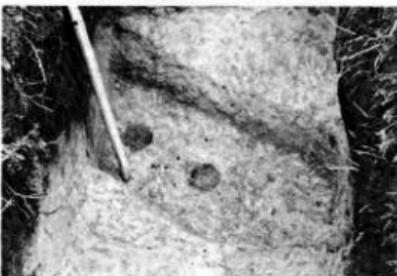
第47図 磨製石斧



第49図 五輪塔(水輪)



第48図 黏混入ローム層(1-13)



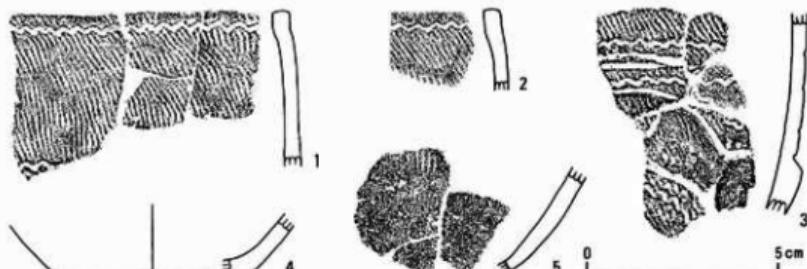
第49図 鑿し穴(1-110)



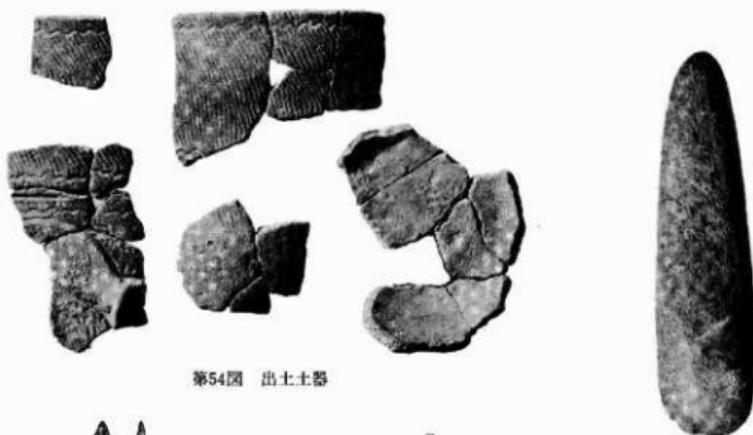
第51図 炭焼き窯



第52図 五輪塔(水輪)



第53図 出土土器拓影



第54図 出土土器



第56図 石鎚



第57図 石鎚

第55図 磨製石斧

がら平坦に削られ、ソフトローム部分が存在しなかった。また、土器の出土した土層は、他の試掘坑にはみられない暗褐色粘質の硬質な土層で、その上を黒色土（おそらく上部）が覆っていた。こうした点から、住居址である可能性もある。

V 遺跡の分布

以上のように、丘の公園地域から先土器時代から縄文時代の遺物・遺構、清里の森地域から縄文時代の遺物・遺構、中世の遺物が出土した。これらの地点を単純に遺跡と考えると、丘の公園地域では、先土器時代遺跡7ヶ所、縄文時代遺跡11ヶ所、清里の森地域では、縄文時代遺

跡3カ所、中世遺跡1カ所である。また、時代不明ながら、丘の公園地域に集石1基、塚2基、マウンド1基、溝1本、清里の森地域に炭焼き窯1基を確認した。これらの中には、近代の開発に伴うものも含まれているものと思われる。遺跡の分布状況をみると（第2・41図）、丘の公園地域では、その北西部に集中している。また、清里の森では西半部の中央部に集中する。いずれも、ローム層が発達した地域である。今後、遺跡範囲の確認調査を行う必要があるが、先土器・繩文時代の遺跡集中地となる可能性は十分ある。また、中世の遺跡については、『甲斐国志』巻四十七、古跡部第十、巨摩郡逸見筋、念場ノ原の項に、「此の原は中世に清次と云ふ者あり。新田を開き人戸を建て、繁栄して念場千軒と称せし由。櫛（まゆみ）畑・西廻の辺りに五輪の石塔・渠塗（せぎあと）等あり。」との記述がある。これが事実とすれば、今回確認した、溝や五輪塔もこれと関連するものである可能性も十分ありうる。念場原が、柏前牧の比定地であることも考え合わせると、この地域は、先土器時代から中世に至る人々の足跡が多数発見されることが予想される。今後の調査・研究に期待したい。

昭和61年3月25日印刷
昭和61年3月30日発行

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第14集
山梨県北巨摩郡高根町

八ヶ岳東南麓遺跡分布調査報告書

発行所 山梨県教育委員会
印刷所 まいづる印刷

